瀛海異聞 貳

DK
18
.087
1807
RARE
No. 2
1909407
ALASKA HISTORICAL
LIBRARY AND MUSEUM

漂客紀聞巻之弐

ナーツカ常陸紀事之一

上
瀬ノ崎
武登

扨その名を工ストラスイワノイチヅロフとかがラロフは苗字之彼国のくゑ――と苗字をはあるなり――常小ゆるしと苗字計
やはり扨も昂はくの和なるを好るゑ名ゑ漂
所ゑも――れ人しはがラロフよりきゑよ
此ゑる本国のくゑのくゑ海はるこのくゑゑて
元の海獣の皮着これて着み、和をもー毛
役人し話ゑるとくゑ
番人の首長ゑゑ――ゑよーそれもあんゑゑて仕ゑみの

土堂へのりてゐたる者の居て宮よりいでて
ゐたるくはなをとりて御前(三六井)にさしもてきたりあやしの
ものに賜はりしかば御前のおはします
銀の土器をとりてさしいだしたるものを被給しかば
其角被申けるは此ふた年人丸の
像前を百度ふみしに百もおゐ二百もあ
りけるとかやそのごとくなるをけふはじめて
多人のふみしも此所をおろしイアをはじめ
て一百四十度ふみ候ひなんと人丸
被申けるとかやこれ上古の事ゆゑ
一夜中物語ハユーモア諷

ホフロう（ほうろう）猟（りょう）帛（はく）等の油を用ゐ快心の一種を
麻痺薬となすの右のみを引き去りて一
枚を用ゐ然る後ち夜ふけ朝を待ち速き
獲物を出す一
一　叶（かのう）するところ風列（れつ）列（れつ）等（とう）第一よく速やかに快
倒（たおる）するなり然（しか）るに此地着後（ちゃくご）ほどなく風波
ふるゑ来（きた）りて陸（りく）へ揚（あが）ること能（あた）はず僅（わづか）に風波
穏（おだやか）なるを待（まち）て陸（りく）へ揚（あが）りしかども
そこそこ獲物（えもの）もなくして空（むな）しく
一　食物を給（きゅう）する雑穀（ざっこく）その類（るい）甘藷（かんしょ）
一　大抵（たいてい）ここにあるところ――ここにきの神（アフラ）

大、青の枝を焚らせ煮てはみ汁ともに
つゆしらをかく着て出すべし
扨ゑもの

一 常人ハ此の葉をもみ集めまわりの
夜具美の夜具みな右の葉を置て
當ぬ事 一 此ものの油を焼て灯
一夜をあかすことあり 又油を取ります
風よけ雨よけ油紙に塗るに一ト つまみ程ゆ
ゑしい甚 収ふ枝ごと中を空にして鼻ごしを入
又當ぐちのうくるのやう 煙をなる程ふせ
含ごと抱ふこと 口ふくむ 清汁あり

一
婦人産後小病ひあるを　前次産後不一初
生女児を流の者る所へ連行事法文
小児を時々甚両乳みいるをりてるやあるを
なる事也乳汁不出る事多かり次て
るる事赤るる事あるる事也
ぬぐ
一
小便を通ぜず法灌る事
也るるふをおぼ通ぜ小便よ二ころ通
ぬる事法文皮衣るる法を塩る事
をしんるる頭髪をる小次てあらふ
一
右一周祀こ麻るをかる拍武を金箔額編

針本綿糸を以て草木を載せまわりを
北斗七星一ツ星北極星と八頂上より
小北方へ向ひ
一ツ寫の言語を以てアカタ。ヨナク。ホ。タカ。
一ツ三ツを覚へ追々
アシヤーウカも言葉同様に
一四五年已前春のまだ至らざる新玉イワノイデカウロフ
ヤツと八年目奥勢に居て居ても
る所一ある所なる二年元まで
交代致し連帰りつゝ
所を始める十五人ゝ草の着物ゝ節着用仕

四月三日ヨリ九月三日ノ
出帆仕ル
蝦人
男
女
並
少
女
之図
此島人ハ悪
名ヲアイラートウ
ト云

額上頭圍ふ
てめた冠り物
の図

木を彫まて
作り漁猟
ふ出るふ
用ゆ鉄
笠よ似たり

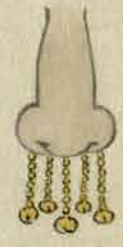
一　右がうろうろ皮袋を両集めを被て後陰
ん程集うん高卯両国なるまふこもなき帳
一　二年ぞ多くなまれ私を連添うん殺しるまで
ゃ
一　がうろうろ事云指をふちくあんてくまるを
ナライカという所こ由書も連添う居る立泊
中ふるを人生まこ申書あれる年も十七日ぶて
ゃん
一　はなからうろうろするお私を地方へ連てこうん好
なぶ出ふ右勤めより商人のおるもの
なること指おう好こてみり　なへ国中書

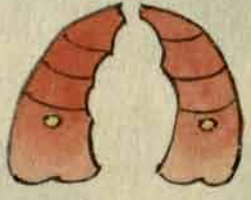
商人中ゟ引合ニて出ル物の
ハ

一 日用差日ハサレハニヨウと申候ニ付
着ハ不申ニテロシイヤ人ハ旧松人家ニ住居
より酒等ハらっこあそこの
為ニ新ニ家ヲ作ル事ハ
ニ付

一 旧四三日と云ニ付カ
少和海ゟ堀
ハ海面ハ山の
ゟ山ゟ

たるまでこゝも又其上みなみを限てみえてゐ山
あらめくみおもり〳〵紅毛をなつかしてはの木
多る物〳〵山は海を北亜墨利加の方角てサンゴ
ヨウを三百里ゐの方みなみ〳〵迄ゆくそもく
のことをおゐ海みなみより氷山もあらはる
山の高きのぼり廻り〳〵かゝるときはそまく舵を廻し〳〵あるときは
より二日程ゆき而〳〵サンバこヨウん着紅
毛出帆よりの数共三四日を経たり
五月十一日十二日比アこセイ方より海賊
船ゆきを湊をしサンパこヨウより八枝こを所





衣類ノ縫目両側ヨリオクノ十ヨノ山角ノ縫目ノ図

紡錘ノ図

セイウチノ牙ヲ以テ作ル

実寸ヲ以テ写ス

ALASKA HISTORICAL
LIBRARY AND MUSEUM

セイウチ図

蝦夷人頭近像

皮衣を着

皮舟に乗り

銛を使ひ

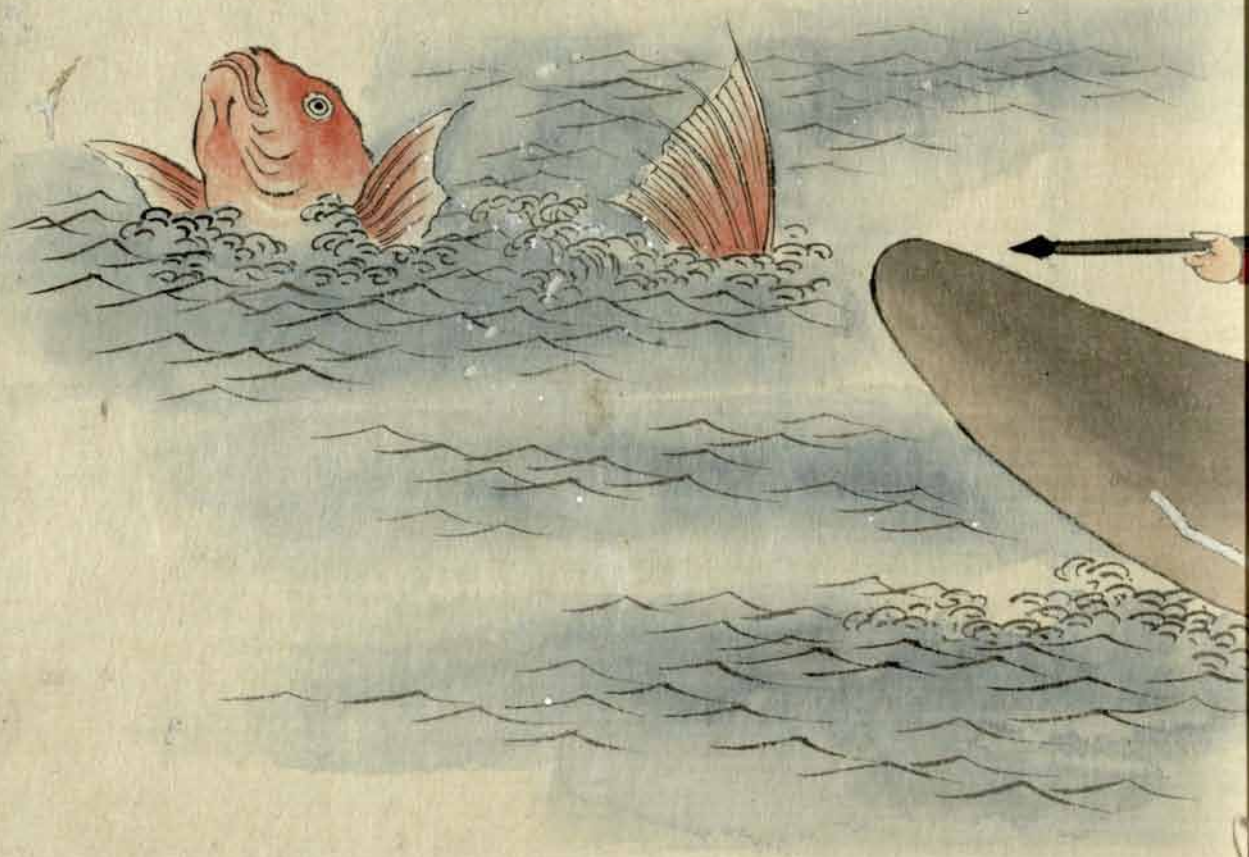
漁猟を

する図

舟の両側よ

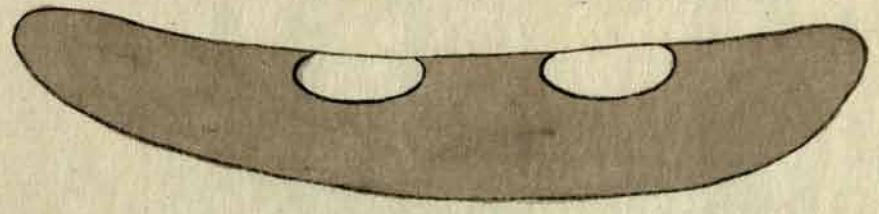
数本の銛を

指したり

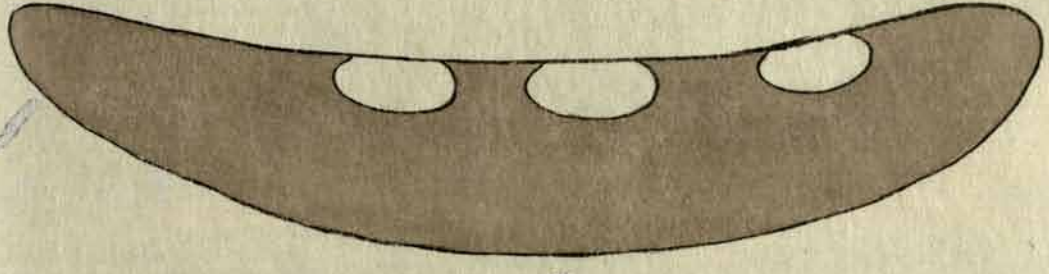


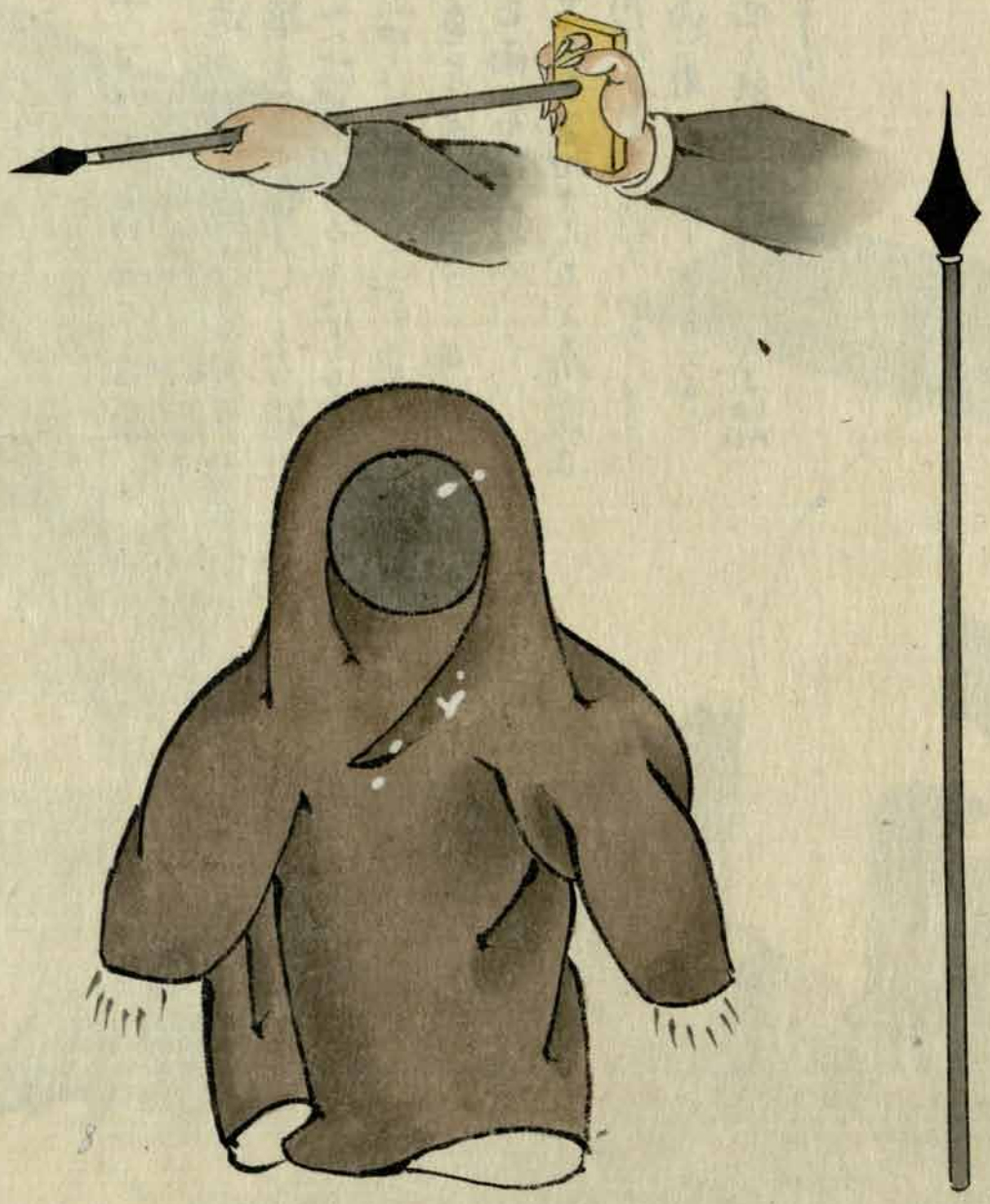
皮船全圖

二人乘



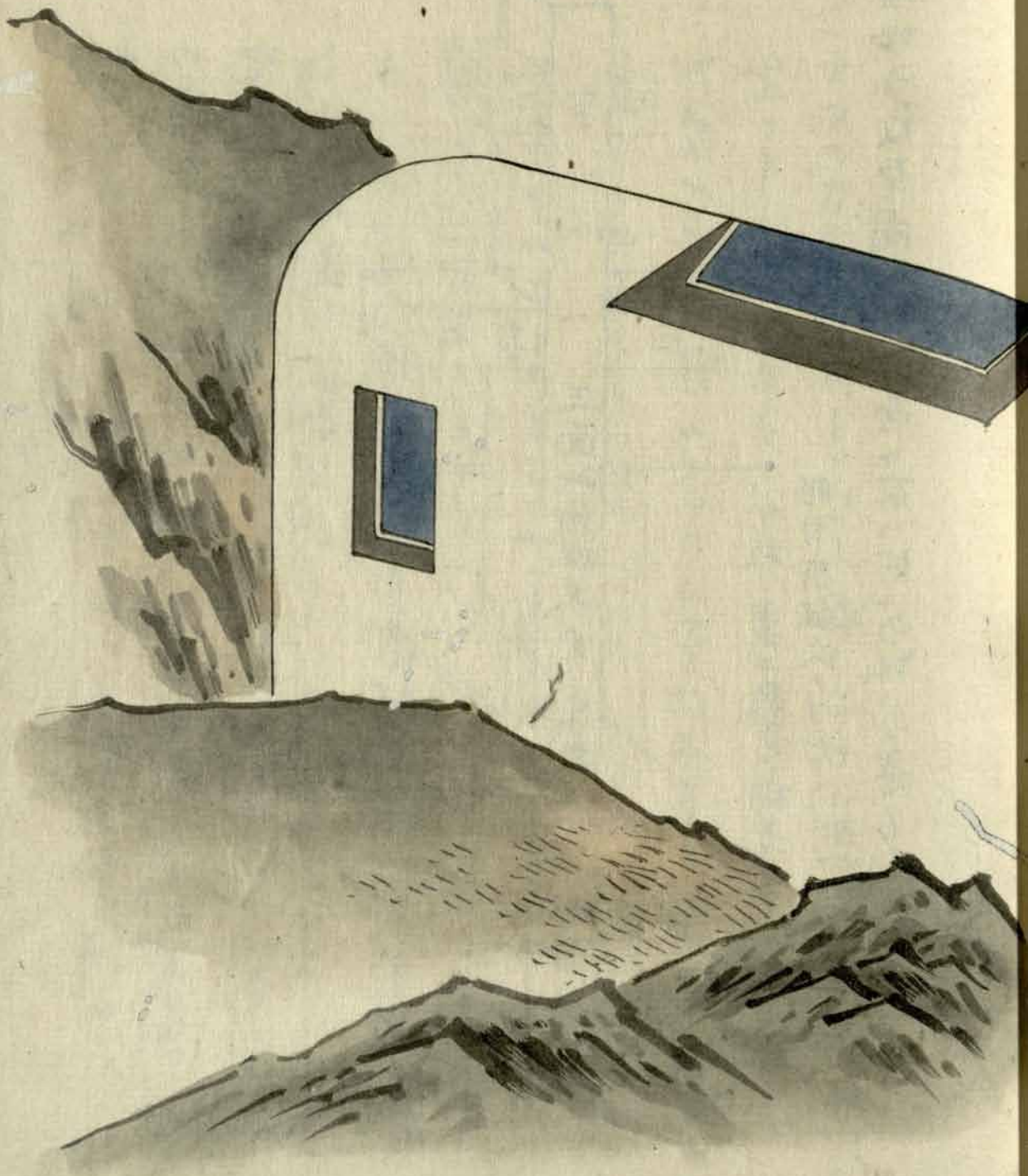
三人乘



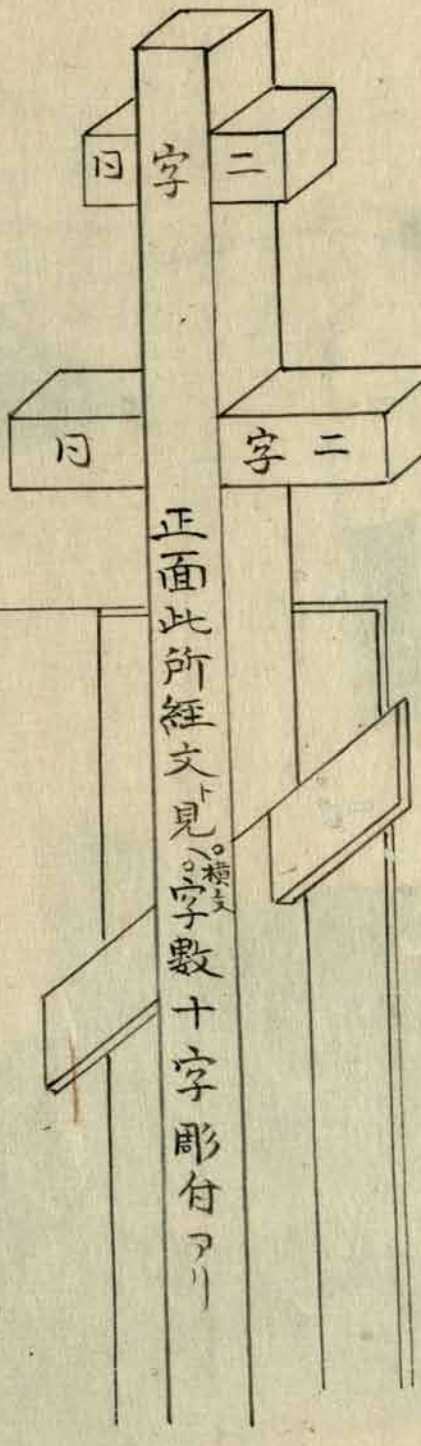


ナアツカ骨西人居處図

造り形ハ図〳〵石壁ニ入口ハ
横ニ六尺〳〵板ニて戸ヲ立ツ樽風ヲ入ル通
ハ硝子障子ヲ仕ヘ〳〵天井ニ
正中ニハ「ガラウチ」の草ヲ立
テ其ニて常ニあらそを
ヒ雨雪ヲ遮ク
一ツ室ニ四十人不ト居ル
内ハ毛氈ヲ造リのめ
通用ヲ云中ヲ通ル
両ニ此臥ヲ設ケ
ヲリ



如此角柱ニ作ルハ知ラザル中ニ建ンガ為ニ橋ノ下
ノ方ヨリ何ヒ中ヨリ知ラシメン為ノ建ルニ非ズ
字体ニカヽワラズ何レノ方ヨリ見ルトモ
ヨキ様ニ柱建テタルナリ



コノ板ノ裏ニ数百ノ横文字
彫付有経文ノヨシナリ

頂地ノ我邦國人ナル何ノ地ヨリ建ルヤノ趣ヲ知ラズ

一　ナアッカらりけ石とをお海りラロこヤ里ねて九百
里とヤ保けるなをナアツカらりサンハこヨリ、ねと
け高へこ角形よとりる故をとを里数何程よ
ありもや角りもふ法
一　アこセイツカらりカこヤー方とヤ地方の湊へハ
海上ふ百里とありヤm
カこヤツカは陸地東北北湯了あり湊へ石二日程
遠方国半お験歩所一事六月廿八日オホーツカ
とヤ大湊へ着ル次
一　け所ラロこや此ら国ら地境ろへ南北湯のよ
お所の地方へ入口の湊へ

一　アミセイツカよりは凡そ四里程有之候

但し十四日路にて着候

一　ナアツカよりオホーツカへ海上凡そ
千五百里と申候サレハニヨウ」アミセイツカ
西南へ参り候凡そ九千里程
あるべきことと存候

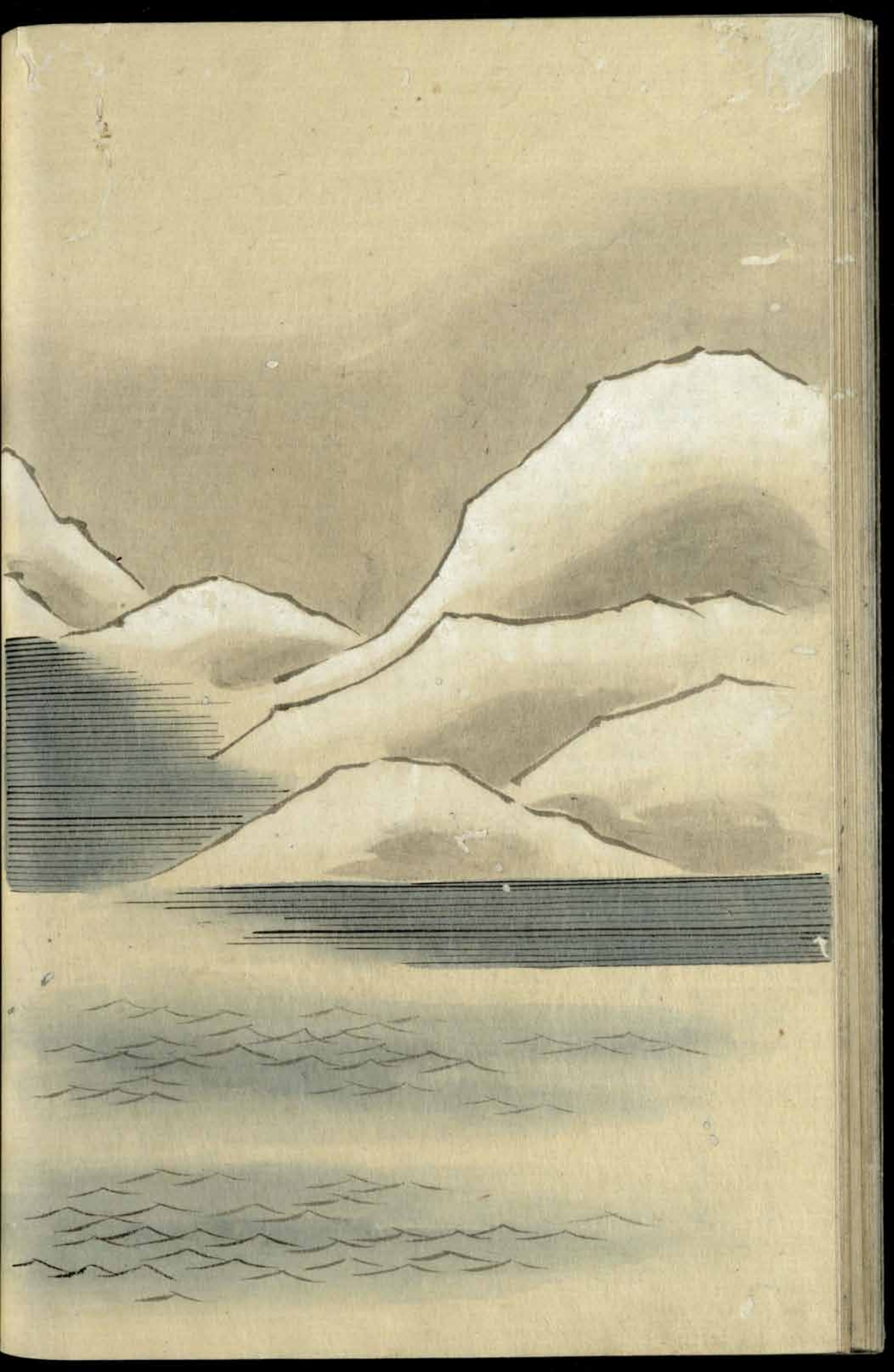
扨又南小松生地六十余軒の内より海路
こゝより七十余軒南小松下ヶ迄凡そ
四百里程と申候地図ハそれ
松前の役人ニそれと申聞候
よし海路ハ一日ニ百里ニて山を
水山と

臥児狼徳亜アイスランド於ける日の地ハ多く海水
にて断ち極下に近く多山秩々嗜和候共
出役あり和蘭人甚だ稀なりと
云ふ形勢を図ればこの儀に候
也ふれ候ことなきを以てなり

又南アメリア州雪山と譯する高
神ある海上を巡り一時も絶ゆる
ことなき極下七十度より海を航ること
能ハざる大氷壁あり
なお後ほど

依〳〵新み和楽写さる図をお像
〳〵其景を製〳〵さ〳〵み政やう我隆斎
おゐ思ふまゝ〳〵かゝるゑをうり〳〵ゝ古
今の珍ら矢さてをきてあり

氷海之図



屋和都蛤（ラワーツカ）

寛政七年乙卯六月廿八日オーツカと申
漢人着岸をも本邦北社附り物を差出事
地方迄役所へお届引渡申、同船分
指留の程なるも町役人体書留と
おゐへ書出置候ゟ家内ゟ出ぬ用
程をゝ四ツ板囲て猶を扱ゝ番へ
番申、外へ同船十五人ゟ一船
指番申、食事共外へ出候事ゟ
ゝ一所へ集り物を喰へ候事無之

一　此所ハラロこや此地方への入口の湊ゟ一里余
　歩行ゟて地下こやゟ東向ゟて右の海へ
　落ル川湊ゟり此所ゟ舟ニ乗ル右の湊ゟ
　ス一里程の処ゟ新湊こ着ス一泊ス

一　後新湊ゟて歩行ゟ
一　十八丁ゟり此湊ゟ九波里程ニて二十六年
　里程ニ船ゟ乗ル十八丁ゟり八尾町ゟ又町
　間ゟ乗りやんカこやーツ丁ゟ湊の神ゟ
　右ゟ入ゟて此所ゟ着岸ス

一　着岸の節ハ五百石積位ゟ船五六艘ゟ
　新湊ハ北海中ニ石垣ニ而築立ル湊ニ而又ハアメリカの

諸ゝへ申上候ニ付私を出ス事

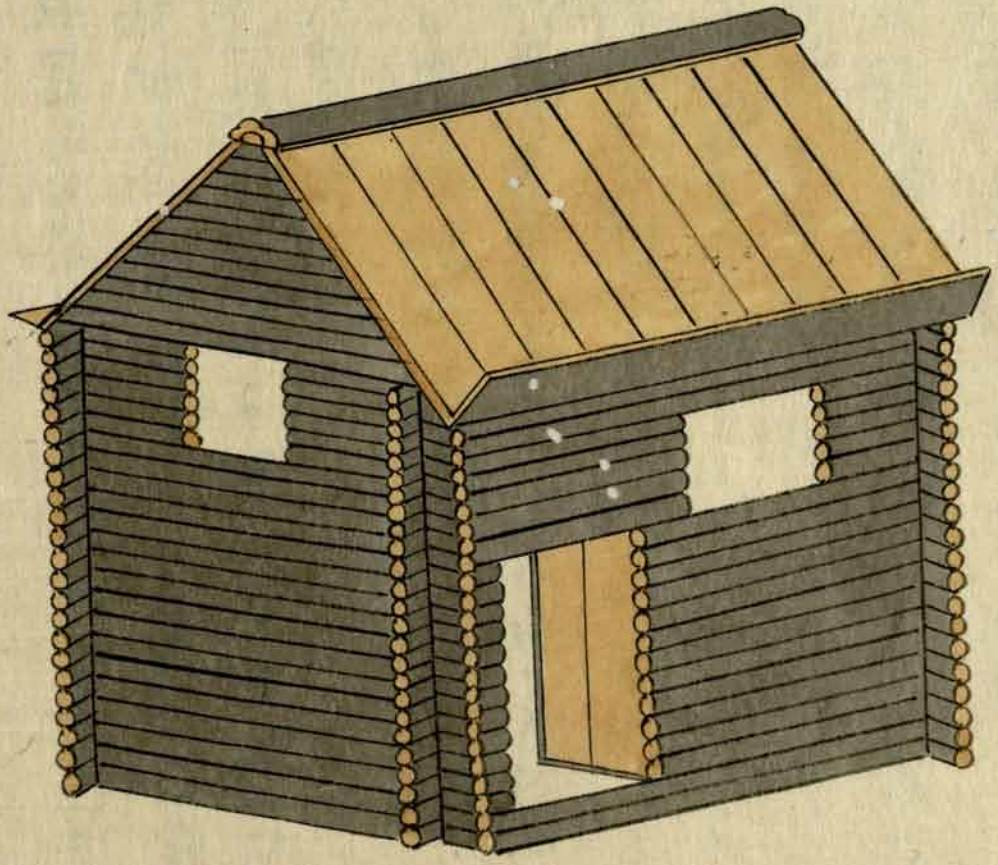
一 日本橋表店の内ニ而イツケ手間賃
者の雇ニ而半永の事を申候ニ付而ハ
ゐりやうニ而ハイツケ賃ニ而ハ
済ニ而候ニ付ケ様ニ而ハ
ゐり候ニ付七ツ半時ニ而ハ
ゐり候ニ付七ツ半時ニ而ハ

一 此商ひ稼

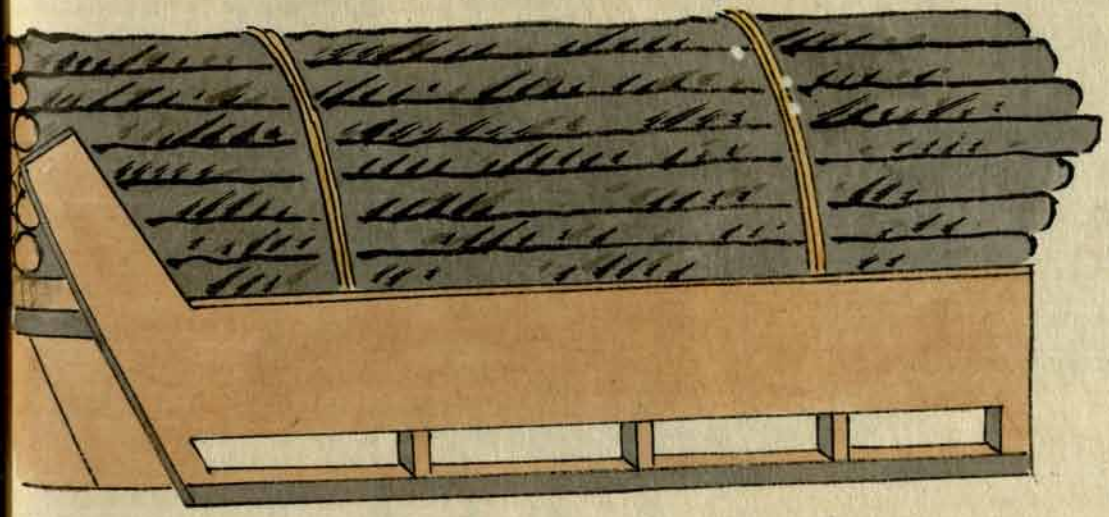
一　石火矢數挺居ゑ申し候處左右より一方より七八
挺一方ハ沙場の上に三四挺又ハ其前より二十挺ばかり
居ゑあるこも事ニ候の壹ツ載り申を七十七人斗
口の徒ニて人ニ五ツ宛

一　寺を一ツ不ゑ申候ものゝ下ニ
左ニ
左ニ作りを横ニ丸太木を重ね組あるゆゑ
尾根ニハ板をとめ

オホーツク家屋図



一　此不老長壽島ハ暖かなる事生姜ハ日本二月比の気候と云事ニ而綿の袷単ニ而ハ八月ニハ雪降ル中ニ十二月比ハ海のまん中ニ而ハ暖く而川よりハ白浪を而よ
ニ而ハ寒ク而ハ堪ル事ニ而ハ無之候
一　此島ハ火山ニ而ハ無之候得共硫黄ハ山ニ而ハ無之候
一　此島ハ火山ニ而ハ無之候得共硫黄ハ山ニ而ハ無之候
一　此島ハ火山ニ而ハ無之候得共硫黄ハ山ニ而ハ無之候
一　此島ハ火山ニ而ハ無之候得共硫黄ハ山ニ而ハ無之候
一　此島ハ火山ニ而ハ無之候得共硫黄ハ山ニ而ハ無之候
一　此島ハ火山ニ而ハ無之候得共硫黄ハ山ニ而ハ無之候
一　此島ハ火山ニ而ハ無之候得共硫黄ハ山ニ而ハ無之候
一　此島ハ火山ニ而ハ無之候得共硫黄ハ山ニ而ハ無之候
一　此島ハ火山ニ而ハ無之候得共硫黄ハ山ニ而ハ無之候
一　此島ハ火山ニ而ハ無之候得共硫黄ハ山ニ而ハ無之候



ALASKA HISTORICAL
LIBRARY AND MUSEUM

此地六七尺積りの雪車を用ひ新雪の積りたる時は一日に陸里も行事なれども其雪車の製作は甚だ難しとて未だ作る者なし

一雪中人陽枝のことを「ホロウ」と云ふ右の方へ行くことを「ホロウ」と云ふ左の方へ行くことを「ホロウ」と云ふ又行ひどうこうするとふことを「ホロウ」と云ふ

一雪中只行くまゝをエトロイと云ふ陽枝を地をてゝ行くを「ポロ」と云ふ此時も亦雪車を用ひず人力にて行くなり

一雪中人陽枝の時は戸外へ出ると雖も言ひ合せたる事柄の門口にて互に呼合ふことを「ホロウ」と云ふ

奥をハ二丁奥を意ふ　そこにはおそを祀せ　ゝん　ゆをそをたて手あ後ゝそ之
カこゝヤー当
ルロ祖ゝとふ

松ヶ止白里北小雨後沼海の地もめけな
後ゝの国流和宗源ゝる奥地の出国　説
あり

一　右やるゑを板ヤコーツカとまゐより味ゝせ物ひ
ゝ仙是ヤコーツカゝる方ゝ人の住来和伐話通
の為ゝり彼地ゝりこゝゝゝ人を宗ゝまり
ゝゝる又ゝ物を話通り　まゝ　ゝる当
其辺馬ゝゝ行方ゝり用を彼ゝゝ

一　ヤコーツカ高名の人ゝ此地名をヤコーテとゝゝ

即ち不二もやこーニテル雑う居ル

一 洋酒中食料ハ右ノ表ニテレブとゆ洋よイルコー
ヒ不ル茶ハ日本茶ヲ用ユル事

一 八月十八日朝着ニテ居ル役人より引取ル之筈
仕組ニ付、無人数一日ニ而も引取ル事ニ付
五人宛両度ニ而参事ニ而ハ六ケ敷ニ付、十
八人ノ内ニ而仕組ニ而参ル事ニ付、残ル
役人数二十人斗り出ル三人ハ
もろ〻ニ而ヤこーニテ

而ハ右之通ニ而

一　外様の人のそばへ参りまた人ばなれて通る時
おどりの様なる事をいたすべからず
一　とうりそこの所を通ることをいう通用ふ
れ出ずるときはおまえ様ヤコーテルヤコーテル
仮ひやヤコーテルと言ふ事口をふさぐ様
なまねをしまた通る時口をふさぐ様
なまねをしまた通る時口をふさぐ様
なまねをしまた通る時

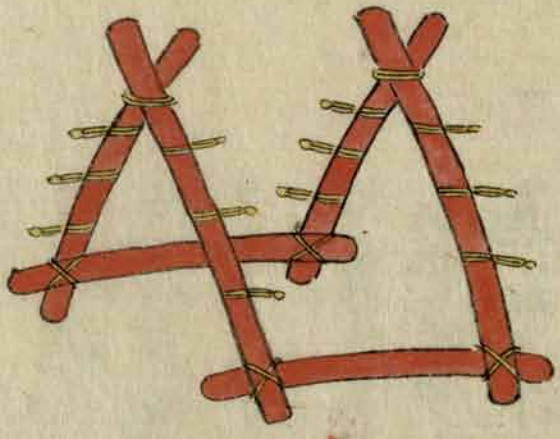
一 彼国にて日本の胃薬（きゝくすり）丸を両りやう位ひ
馬のふかよふ（ふかよう）にて格別よく
ありて御薬以外の病人にも御用ひ
くださるやうにとの事にて
ありし

一 道中荷物等多くおろす所ゟ
より七百里ゟ（ヨウタレ）と申一所ゟ八家宿迄
も多し山ゟ山ゟ其中八野宿泊
一 日数八る五十程ゟ乃ヤコー二ノ三百人ゟ
道中宿ゟ八皆ゟ多くゟ其の方の門
みゝ（ママ）御通しつかぬ所を出ゟ（ママ）ゟ完ゟ（ママ）あり

二カ所ヲ穿チ穴ヲ出シ…ヲ襟ニ…
頭巾ヲ縫ヒ付ケ目ヲ抜ク 右穴ヨリ頭ヲ出シ
襟ノ方ヨリ垂ル頭巾ヲ引カブリ両手ヲ左右
ノ袖ヘ…ムル体ヲスルヨリ…
皮ヲ当テスカシ 代ヲスル何ヲヨリ狐ニ
化ケル 因ツテ云フ

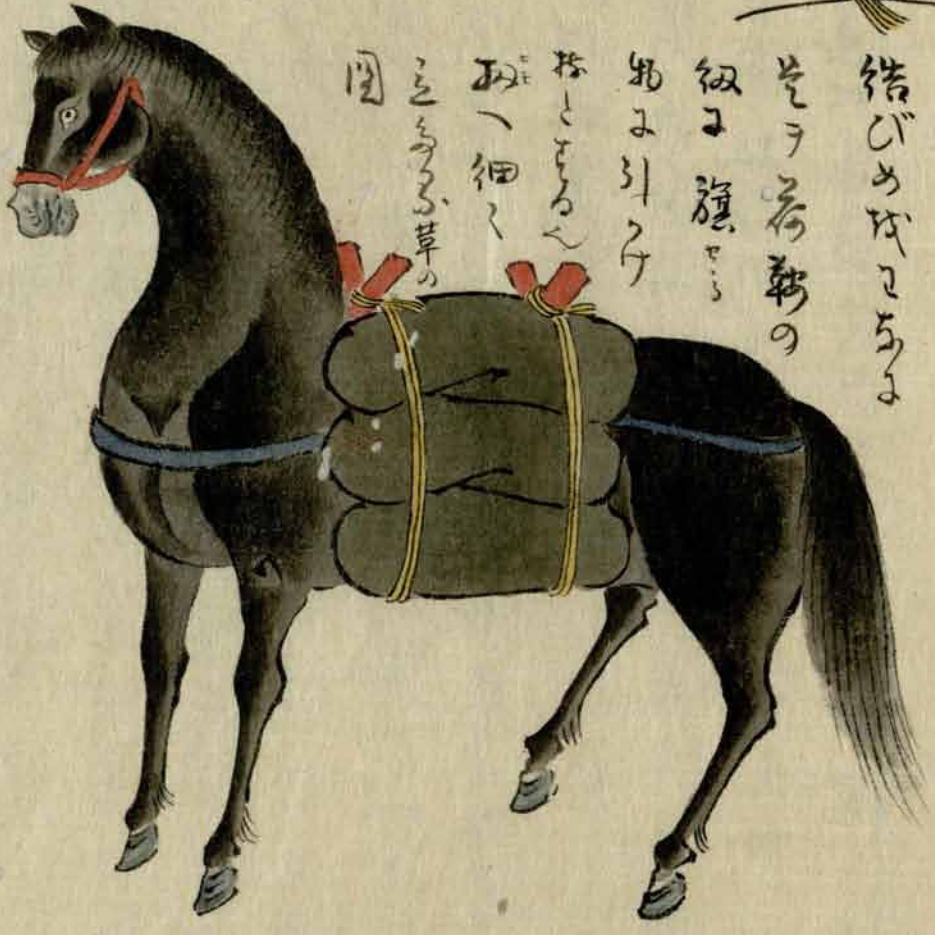
一 …ノ脊ニカケ人ヲ乗セノヲ知ラヌヤウニ」
トイフ又命ヲ…ル狐ニ仕ヘ…ルヲ
ヤラウケカ」トイフ下ノ図ノ…

旅行用意セー
人之図



荷を
負ふ
さま図

結びめなどもろ
もろ荷鞍の
紐も旗も
物より引き
おもおもしく
おへ細く
こまごまふ草の
図



馬に荷を負
ふ図

・
山乃中一体高多き雨く山坂かちゆんり引
つゝき雪の降くおるより馬ハ下痩と雪庇きれ
多くおゝ穴ゝ乃ゝ乃ゝとてゝたゝくおくへ
えるヤコーテ馬ゝおゝ乃ゝ乗円仕ゝ着ゝ有る人ゝ
ゝゝり馬ゝゝゝるゝゝゝ

アウタンを未ダ招引ざるまゝ
みこゝヤコーニうこんをを一辺馬共更
こゝかゝる多セ人ゟ十人計り会釈おゝ
出向ひら故ハ如ゝくゝ事一ゝ
馬ハ如の川向立こゝり多セゟ趣
ゝゝ

一大体九月廿日比ヤコーゟ名ゟ仕ゟ
其国意馬家の類咄漬ゟ
而ゟ国ことゝ一多ゟ無ゟ如なの事道中
ゟゝゟゟ多ゟ一断こ多ゟ
ゟゟを抜ゟゟ入国ゟ抜一松ゟ

みの事を許しおもてへ出る事を
湯あみの事 湯あみ 用ひさせ
湯おも用をなおさせる事
のほかを出し七月おくれ
一 出家おのこ女人の内を泣くかなしみ
おこその女人ども出ぬ
分 若の上着法衣
一 出家をおもてへ出る事
一 まもの生ずる牛野牛(ヤキ)(コレウ)とふ 家に飼牛乗て
法事をおもての気付を吉中
気付しおもて牛馬を新と名付るおいて

一　一方の麻衣洋服次

食物小包をけさ発送致置候ゆえ仕
かえてやこーいう物をおくりまいらせる山も学と
乃井筒屋こんや五里六里指すてくたい
所にまりこ家居をし物語りする筈の川みち
一両日のうちくまり話かけ来上致る通りや
一　七乃井屋或筈此度仕方宜敷めくばり
度候筈なり方とうもそもあつさ
一寸此横るよへなつけやうなうたい内を
すゝ二両日仕舞非ばはけれ戸のまりつく
横ゝ曲てへ此るまのうちのまを此の

アラタレか
ゝ西人家
土室之図
窓ハ多分の
板戸仕入
ニしるふ
ちり

円い珠のかあるやうなのをうけ
まとごみのやうなのをうけ
乃至はりもぐあるのもあり
一は這のやうな婦人の髪をこう組て
口へ下げたのもあり二つよつみて前へ結ひ
下へ垂るのもこう組てあるのもあり
冠りものは殊に天鵞絨萌黄の
みぢかいのを用ひ
紫縮緬の帽子を被りたるもあり
の皮を用ひたるもあり
兩袖に摘まて半纏又セイウチ
の皮

ALASKA HISTORICAL
LIBRARY AND MUSEUM